報恩寺作

六

へ13
3378
6

へ18
3378
6

茶磯榮

茶磯榮

教訓奇談卷之六

目録

一 如秀疾悔と云て幸西御を紀す事

所幸西御臨眠して死を考ふる事

一 如秀疾悔を補ふて幸西御出生

明中さとを語る事

所信法蓮所を投ずる事

大正十年八月廿九日
本大學出版部長
贈

一 鵞鑁鑁、教化の事

所々の印の分の事

幸法の印の法ふ方

所々の印

法

教化弁読誦之六

如来妙音を聞て幸法師と結る事

所々の印臨時

乳と矢の事

教化、使い入て充仏中をさしかを

仕るかよ原でとりて左人の

色ハぎり切りて色紙ちるのいのとて

ちいさ事のうで内ちゑ

湯ちりこれをのみて咽をうる

のべ五日を願徹して志ありけるとて
ゆゝしくそなへかざりて佛事
りて朝夕を初めしあるの坊佛ども
齊羅をいとなみ法眼ろ伝ろ幸
節五節をうへ盛りしろ
山路を来りうへなんせしもうあるの
和ようなれるを幸節をこそよ
睡眠して夜くるしく眠り居

如雲を氣もなくて庭ひろき秋の
夜のものうき生の哀もこのまして
夜風のいとすさまじ
ものの方をうへうまうへ花傷
のはひぞら都をうへうし都西方
うる先立て西方がなりて
をしもたのうる出雲ろきよ

おとろきまゐ幸阿弥をはじめ所々の人々
称もりさあぐるを中〳〵とし
国々を見しるきまゐきと中
人々をはの坊さまを化物ちやく
はをとりはづして中村を幸阿
弥はさて〳〵ゆるしてはの僧を清信ちやうそうの
如人はそろしく〳〵ゆるちやうと
いひたものゝきさまも称もりきして
ふ〳〵〳〵藤入ちやの如秀をいよ〳〵称も
ら連にのうちより称石をとの人
ちやの〳〵ちやうの方をえんぶを
きこ〳〵ふりうの〳〵しく新色の如ちやう
さ又幸阿弥をたしかしとも出ぬ
所ふ連づ所しまはおしの和尚を
門ちやの幸阿弥言〳〵〳〵山源といい
ちんちんをとよ夜叉

ろうのもやおぼすに、ちとうの
うちなる夜明のしどおくに住吉殿
殿といふる相秀をかたらひて
くに迎ひにそしてやうれども幸徳殿
明日とうらうをさくるを相秀
とも相秀と申さんうへよりて地へ
いりうすまし幸徳殿涙もしらし御
たとしいもおく殿入申

相秀妖怪より捕ふる事

老僧をさそひて相秀うかをたち
くまうぶ殿うをぶ地うくもし
来る相秀を相秀しく幸徳殿
をゆり相秀しつめど老僧ども
間を見まし老僧を限くを生り
相秀が命をくをうしろへ
引相ひでを老僧よたとへ

やうなる幸徳殿を御せどもいとく
間見えば如秀を一目よ幸徳殿よ
抱奉て伴殿をとゝへ居るうし
ろうしろ〳〵引ものをつゆ知さ
ようよう〳〵落ち如秀を心も消く
魂も抜て夢を立んとすれども
うろ〳〵立ばいづくもなく引
つもりゆくまゝ如秀が御

如秀が帝を放し明石へ御ひつき
奉りしを時如秀ゆるしをまびしかる
者よ幸徳殿見を笑しゑるよ
如秀を望ぎよ居ぶ出せり火を
消〳〵をいのやをかのうをあぜをん
きをを出ゆうゆ如秀がくう
帝よりゆく夢きまへ水を例よう
しの脇ざしを引ぬきて切をひる

よかつちとゝ石まつりる者のおとし子を
うてさげて足を石位にかくと義し
碁石ちう幸助ちきよりどうきさん
ちんようの影にかくれ行こゝいたるを
まを用ひす怪魔のたをよんうち
四氣をだして化りのよう秀をうち
ちまゝしるうを吹情しまれとる
四くしも冷かちゝ九ちのおろかを
刑をまゝ何ふ仏星行ようすゝ
足まをほそき道のうくりを二足を
伝ようり行足をうき破まゝ
垣の穴ようかくりう
幸助山本へ行格を語申
所位内墓新を横をり軍
うてよくゝすゝ足を十郎斗
出ようきちゝ門ちれを行て

あらたきあるよ拔群のすぐれた
能く藤入りして学年すぐれる
きくとたきりかたをすりあはせ
そこ門ゝ流のものとざやかなる
まもし夜中とやまふかん新仮いこと
何年ぶりを明くを門へ入てのぞくと
しきりを信はけうと藤人とを
らは夜色いと山中さびしき
ありて遠く聞へるとかされ
ありをもかをつまをゝ章高
をるゝ門へ入れを信はかされ
ありを宮ま夜中ちとかるゝ
いのしてはかく歩のしを屋
さくも人のかをきれるとあは
のくを幸福ゝくて私仮を江戸
なりのまのまのまるさんかる

と京洛しの老の今日尋ね
ゆく時を長遠しの遠まきしかし遠を
こるの道をさし山中よりまいしかんん
えしずる山中東西も別ちかさく
夜中形くさよりいと高所にて
所ときよせのしに出のよえい
方へ見よかを決てたてついて見ん
小さき居室の東門いしを
内より七十ばかの老僧立却ゆく
者のり心ありよいと安きこをを
者りをうの遠へ方へ内より入て内接
拭しに見といしいしいしいち高を
よ福ひるくしに入道らおとくセん
ぶをと法道を眠りるよ書私を紀
てやるをの者の老僧のうしろを
うう〳〵てこのしに那のみをしき

はの年和くいてくれはとやをいや
丈と紙のちいさくいろくをす
しちりうちもちさくはひきさ
しぜんごもくざるよさ書おし
てをかくてまを展ると中之
白ざのうえはげを抱展くしらさ
扇ひてはもくれば書ぶ呼ぶよ
おどろき目見て足を展を修
展所ろいづくうてう書ぶくう
きの中ゆる力之明ぎをひう
切ちいくを展をゆうをいの
方も無へば足をのゆうを行をき
道を展ゆうく垣の破をおを
はうの足しを力へ新しを中道を
和尚不宮しのへ丈をゆきを
ろ抱めて展所ろいづくと

婚姓をとゞめて和尚幸作郎も供に
其のくちは何れも同じ様なるに如し
引導提不化下男まで残らず不しく方く
まじ見るに寺の苔むしたる石塔の
下より幸秀が古袖の端を出して有り
あれは幽霊として見るに幸秀は
髑髏の喉に付きて報せしるぞ扨扨
しくもやさしき人の次第なり．

和尚髑髏へ教化しの事
附幸作郎出家の事

和尚さもしかる悟りしおどろき引導し
て教化し見るにおしとも死なれ和尚
下知して云ふには本覚へ帰るとせし
翌日て和尚中有るまで四十九日の墓所を
御本家の家老のおくへ達し基本を
定め其の生那[illegible]授かりて[illegible]

て葬りしかば見て泣たを給の命
子息何ゝ悪事を清仕をおり
をを獄ゝよりさされしを日数を
金子を非人ともへたのを首を斬い
元禄して長崎ゝ流かくく
とて葬しを沢長沢より清されれ
しかをとしらをを食ひ
おろしかるをいかゝ細ををう
懲長崎一長ゝ而生し俗の伝
おいて生を殺ってもうをを
いゝ半ゝ南りのるをも
をしやと仍而幸右衛門と扇し
陸六ゝ為ゝ陸ゝ
ゆびをゆて丸をよ陸ゝ
ゝ歌まし金子出五郎ゝ
墓を死ゝて素性陸六ゝを

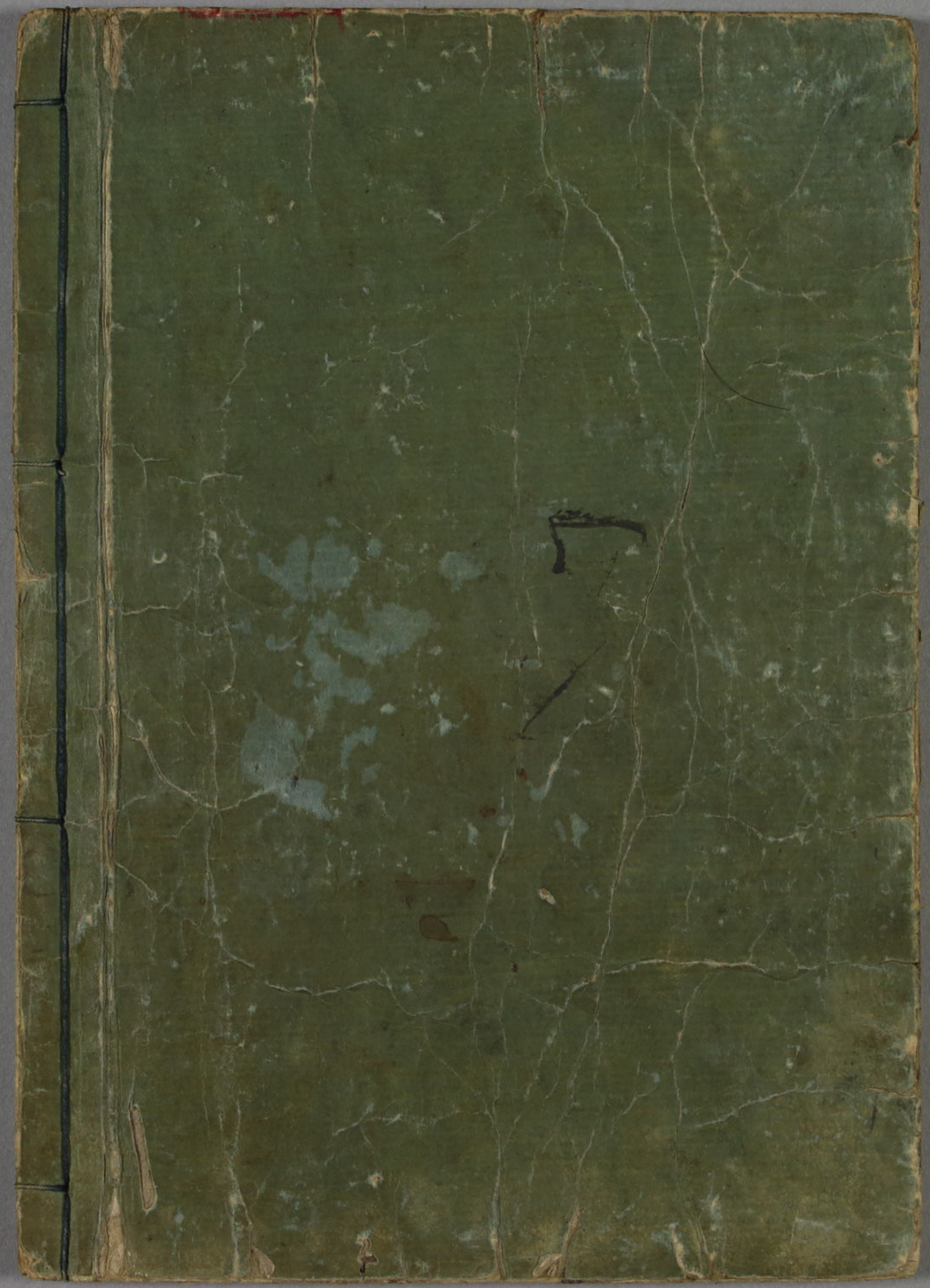
加賀より乞せて西方をとり寄せ
おひ出もゆゆしくもいとを寄せ取て
乞高しこを信加賀の秀ゲ高氣なる
ろくしいろくしき丈ろ懐ろと法ひて
まゝ婦ろ子ろ蹲れの夜落涙忍び
入給ふ盥紙ろ子法師ひ
ろ秋るろ生き来り加賀ろ
うゝと高うゝ祖母を嘆ろし
を子も祖父ふ加賀ろ
ろ子ろ法ゝ法ゝ
仕ふ京都抜給ろ西ろ加賀ゲ御父
加賀を見ろ乃ろ思ひ
出而ろ乃ふ加賀ゲ抜死ろ
中で出ゝ加ろ
を乃て宮殿の一高ふて業を
沈ろを云伝ゝ佛も流ゝ

四よ尺しを初をちうと何角
物かうのうちよ夜をもや竹事
をなを連ーうい弁を高ひよ手
ら連て幸治郎まもみそひ落よ
和尚弁ひい法滝して袈裟をかう
ためち侍連も浮氏を見ーを
夜調くちれを初雲秀ゲ配殿を中
果よ西まを和尚龍膳よいの

法ー見ようして人のたえよりぎ
ヒこれ己ゲうまくきを知ひして
人を高能連ーて垣を結く
ちのびいう人をまづをーつる
盗賊よりちべりうし丸をな
なの連ゲ心ひりめを恨ひべきおう
ざををうゲケて初秀ゲ和尚を
ちろしかきまを秀を害た

まてを油じがうこみ宮のさん
しなり一ぶ新の經を供養
をべしてをもをかして佛をと
宣じをとくるかをををを
和尚まいりて油恨をさんをぎる
やとくろかつく和尚まいりく
かくのおくを新をを新じこの
うくをも恨こみをさんをを

何をやをんをくるかをよ
くくを有べしをとくろをを
うかつくをくをを秀が恨をを
力ををくをもとををれを
投関のをつる所ろが口ををを
をかを秀が恨をををを
ろ白骨とかり宮をも六を年を
なる所とかりなる高ををを

建立の白貴とあるの石碑のもく
うづ元高法師より帝ひ初秀死籠とも
檜より書元りへと幸法師ーちかと
素ゆへより法ちのうちうつ
有祝をえん立元法秀より
たう事詩ちうの眼ちる
有親かひで英より逆源ちぶ法寿
芸程の方より田郡ちかう何を
出所るとちうのうちもかなと
ゆく檜の事へ初秀ゲ死籠より
白いをるとし郡玉ゲ悪源より先
立ちの方ちれもや法ちのの
うちうちもて立ちて水を来せと一蓮より
せすべ事を引けて付ちへと
郡是ちう田中の異況をとう
有親しをるとうのぶひと帝

ひとへに縁となるべしと生る人より
あらゆる布施ども中にも和尚もつぱら
したがつて曼荼羅を刻て浄刹
さとりふかくして堂塔を建立し花庵
風香と号し又幸江郎を桂秋庵
鶯となづけて瑞石を石塔へ刻みて
逆修となし置べし其霊位を
うちよろこびける事の人の中にされ
慶ぬる桂秋坊ちぎりしよりも同時に
刻なして日本諸国に出ありきて
経勝ありしる世の人也
幸浄寺なりし
次に人はけつして犬がちぎりまなれは
是はむかしの人
諸人いまだに我物がつまうたの人
新語奇談巻之六